（５）幼年会のその後

①利貞さん、厚木中学へ、転任

・利貞さんは、１９２３年（大正１２年）に座間小を退職し、１９２４年（大正１３年）から県立厚木中学校（現厚木高校）に勤務した。（利貞さん４２才）

関東大震災の影響で中学の教員が不足している中、要請を受け、利貞さんは座間小学校を去る決意をします。利貞さんは厚木中学校でも子ども達の内面の育ちを大切にする教育を実践していくとともに、異動後も幼年会の活動を支援し続けていきました。

なお、この後１９２７年（昭和２年）、利貞さんは「少年教育の功」により県知事の表彰を受けました。

ポイント

②少年団と幼年会の統合

・利貞さんの厚木中学校での教え子、赤井さんが、座間小学校の先生になる。当時幼年会の活動がマンネリ気味で停滞していたので、赤井さんは幼年会の改革を進め、１９３７年（昭和１２年）、少年団と幼年会を統一して「座間幼年会」と名前を変えた。

・こうした改革の中で組長を班長とし、新たに副班長を設けた。また、会員や学校・地域の連帯を深める目的で機関誌『さざれ石』を発行した。

③利貞さんの死と戦争の時代へ

・１９３８年（昭和１３年）、勤務していた厚木中学校を気分が悪いと早退した利貞さんは学校近くの坂で倒れ、４日間ほど昏睡状態となり、７月９日、この世を去った。享年満５５才であった。

・幼年会の改革に取り組み成功した赤井さんは１９４０年(昭和１５年)に横浜市瀬谷小に転任、赤井さんとともに幼年会の建て直しに尽くした教師の多くもその前後、異動で座間小を去り、幼年会の指導者が不在の状況となってしまった。

・１９３７年（昭和１２年）陸軍士官学校が座間に移転。１９４１年（昭和１６年）には近隣町村が相模原町として合併。同年太平洋戦争が始まった。幼年会を地域で支える青年達も戦争に行くことになった。幼年会のリーダーとなる高等科の生徒も勤労動員のため幼年会活動に関われなくなった。戦争が激しくなる中、幼年会活動を続けていくことができなくなっていった。

④終戦後の座間

・戦後の混乱の中、幼年会で育った者や厚木中学校で利貞さんの教えを受けた者達が立ち上がり、１９４６年（昭和２１年)「座間青年同志会」を作った。そして次のような事業を展開した。

「座間文庫の運営」

会員やその父兄から本を提供してもらい、図書館のように子ども達や一般の人々にも貸し出した。

「英語の講習会」

会員の中の大学生や大学卒業生が先生となり、無料で教えた。

「スポーツ大会の開催」

バレーボール大会や野球大会を開催。また、ピンポンなどを気軽に楽しめる場を用意した。

他にも、演芸の会を開催し、収益金を町へ寄付したり、レコードコンサートを開いたりした。

・相模原町から分離独立する運動に青年団も参加。１９４８年（昭和２３年）相模原町から分町

した。

・１９５４年(昭和２９年)青年団の熱意ある行動に町も動かされ、県内で一番早く「座間公民館」を建設した。

・座間町の各地に「子供会」が設立された。

敗戦の年の暮れには４０名ほどの若者が集まって、「今後の日本を、少なくとも自分達の住む座間町をどうしようか」という話し合いが始まりました。青年同志会に参加したメンバーの多くは、幼少期に幼年会活動を経験し、さらには厚木中学校で利貞さんの教えを受けた者でした。メンバーの一青年の文章が残されています。

「・・・・米軍進駐以来、日に日に悪化していく世相の無秩序、無道徳ぶり、これにともなう青年たちの空虚な姿に慨然としたのです。一国元気の源泉たるべき青年層が、こんな具合でよいのだろうか。何とかよい方法はないものかと考えました。幸いに敗戦の年も暮れようとする十二月、郷土の先輩より、我々の郷土だけでも我々青年の手で何とかしようではないか、と相談され、私として、日本の青年としての働き甲斐を痛感、微力をもかえりみず」

こうして始まった青年同志会の活動理念は、やがて再建された「座間青年団」へと受け継がれていきました。